九大哲学会発足二十五周年を迎えて

清水, 正照

<https://doi.org/10.15017/1398246>

出版情報 : 哲学論文集. 25, pp.283-286, 1989-12-25. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

九大哲学会発足二十五年を迎えて

清水 正 照

九大哲学会が発足してもう二十五年になります。二十五年というと四分の一世紀で、ある意味では歴史といってもよい時の流れを感じます。設立に至る事情やその当時の状況をふり返ってみるのも、若い皆様にとってはやや迷惑かも知れませんが、何かの意義があるかも知れません。しばらく御辛抱して読んで下さい。

私が九大大学院に入りましたのは新制大学院が設けられた最初の年、昭和二十八年四月でした。私の学部は京大文学部の宗教学科で西谷啓治教授のもとで、パスカルの信仰観みたいなものを卒論にまとめました。家庭の都合で福岡の親元へ帰らなければならなくなつて、それでは九大の長澤信壽教授のところへアウグスティヌスの勉強をしたら、という西谷先生のお奨めで九大に来て、以来京大との関係よりも九大とのつながりが私の人生を大きく左右するようになりました。当時、九大の哲学に

は第一講座田辺重三教授、第二講座長澤信壽教授のお二人だけで、倫理学には滝澤克己教授が居られ、哲学・倫理の三人の教授は何か「三位一体」のようでした。時々会や集まりには、いつも御三人と、哲学・倫理学の学生が一緒でした。京大ではこういう経験はありませんでしたので、最初はやや奇異な感じでしたが、その後こういう伝統はよいものだと思うようになりました。その後の教官の状況などは猪城さんがお書きになつて居られますので略します。博士課程も終る頃になつて、第一講座といっているのが、正式には「哲学」、第二講座「哲学史」、第三講座「国家社会哲学」といわれるものであることを知りましたが、今日では正式の名称はどんなでしょうか。知りたい気もします。

昭和三十年代もそろそろ半ばという頃には大学院生もかなりの数になり、倫理との合同の「哲学談話会」もコンスタントに

開かれるようになりしました。院生の研究発表も行われましたが、それを活字にして発表しておく場がなく、どうやってペーパー・アルバイトにするかが問題でした。個人的には私は「中世哲学会」という小まんじりした学会の「中世思想研究」という論文集を書く機会がありました。武宮さんには「西洋古典学研究」があり、長澤先生は掲載の労を惜しまれませんでした。

しかし近世・現代をやっている院生には発表の場がありません。そのうちに私が助手のポストを与えられ、フランス文学の助手有田忠郎さんや、同文学D・C院生中村栄子さん（お二人とも現在西南大教授）、美学の助手平田寛さん（現在美学教授）、それに私と四人で、ケケロの「De oratore」の読書会をやるようになりしました。有田さん、中村さんとも、院生の発表の場がないことを歎いているという点で、私と一致するところがあったわけです。それでは哲学・倫理学・フランス文学の院生などと一緒に何か雑誌をつくらうということになりました。「西洋文学・思想研究会」という会をつくり上げて、「論集」という七十頁位の雑誌を発行することになりました。第一巻は言い出しつべの三人と仏文院生の荻野さんの四人で書き、昭和三十七年の二月に最初の論文集を出しました。この「論集」は四十年三月に第五巻を出して終わりました。現在研究者として活躍して居られるフランス文学、哲学、倫理学の方々の名前を、この五冊の「論集」の中に発見するのは楽しいことです。

昭和三十七年五月に西谷先生の御推薦で佐賀大学文学部に就職することができ、そこで生れて始めて、人を採用する側の立場に立たされました。文学部というのは名前の通り、文科から理科までの教官が一緒に同一学部とされているわけで、こういうところで人を採用するときは、どんな論文集に掲載されているかということが、内容に劣らず重要視されていることがわかりました。どうも活字印刷の論文集の方がタイプ印刷よりも権威があるようなのです。「論集」ではどうも具合が悪いのです。その頃、今村さんと会ったりしたとき何とかして九大にも哲学会を作って論文集を出さねば、という愚痴に近い話をくり返していたものです。九大哲学・倫理にも教官が充実し、D・C院生もかなりいましたから、卒業生と在学生の絆をつくるためにも何とかしようということになりました。幸いにも山本先生からも、そう言った話が強い希望として出されていましたから、今村さんとの愚痴が具体的な決断となるにはそんなに時間がかかりませんでした。今道・藤澤両先生を迎えて三年か四年経て機も熟していることですし、さらに猪城さんという強力な先輩も積極的に応援して下さって、私たちより上の先輩の方とのコミュニケーションも進みました。具体的なプロセスや日月は記憶が薄れてしまいましたが、三十七年後半頃から動き出して三十九年には会合をもったのではないかと思えます。会則をつくらうということで、私ともうひとり（恐らく亡くなった城戸さ

んではなかったかと思いますが……)、それに今村さん(?)で、私が京大哲学会やその他の大学のを参考にして草案を書いたと思います。事情が九大と似ていた都立大哲学会のがかなり参考になったと記憶しています。

一番の問題は論文集を活字刷で出すことです。財政的に多くの会員を集め会費を出して頂けるように工夫することでした。そういう点では九大は哲学と倫理学が一体として行動してきた伝統があり、これが何よりの強い点でした。基金を集めること、文学部の費用でいくらか買上げて頂くこと、卒業生には一名位掲載させて、ポストについている方には消耗費で買上げとしていくらか買って貰うこと、今から考えると少々厚かましいことでした。卒業生の買上げについては、抜刷と思つて五十冊位御無理をお願いした方もあります。もちろんかく言う私も実行しました。文学部買上げについては、教官方の絶大の御盡力によつて財政上の大きな力になって居ります。これがなかったら「哲学論文集」の発行は財政的に不可能であつたでしょう。厚く感謝しなければならぬと思います。

論文集については、目的としては建前と本音と区別するわけではありませんが、いい内容の論文が載っているということが第一で、そういう論文集に若い院生の論文も載つているという形で、院生のペーパー・アルバイトにして貰うということでした。ですから、各号には必ず哲学か倫理学の教官に一名書いて

頂くこと、卒業生や院生のは査読して掲載を決める、こうすることで論文の質をよくすること。文理学部のようなところでは人を採用するとき、右のような条件の論文集に掲載されたということは、その本人の大きなメリットになるからです。こういったことは私が最初にどうも大きな声で主張したらしく、その後時々「清水さんによると……」という前置きがついて話が始まることもありました。最近「哲学論文集」に掲載されることも院生にとつて物理的に困難になつてきた、という声も耳にしました。何とか論文集に一名余分のスペースをつくれぬものかと考えて居ります。財政的に見通しが無いものなら、久し振りにまた基金募集でもやつたらと思つていますがどうでしょうか。私が卒業した京大宗教学科でも独自の「宗教哲学研究」という論文集を出していますが、私たち位の年のものは年に一万円徴集されています。これは何だかカンパみたいなものですが、私たち年寄り(?)組には税金みたいなもので仕方ありません。話は別ですが「ディアログス」の方にもカンパしようと思ひますから、係の院生はよろしく願ひします。

昭和四十三年の秋の大会の折、九大工学部に米軍ジェット戦闘機が落ちた事件で、九大中が大きく揺れ動いた何十日の苦悩が、そのまま九大哲学会を直撃したことがあります。大会当日になつてその折の発表者が辞退され欠席されました。後日判明したところではある人々の事前の根廻しによるものでした。

たまたま当日は倫理の森田助教の結婚式と重なっていたため、教官方は殆んどその方へ出席され、「ある人々」の「詰問」に近い非難や批判の矢表に立たされる破目になったのは今村さんとい私でした。ある人々の主張は表面上は九哲会の任意加入ということでしたけれども、実際はどうも「ジェット機墜落事件」について九大当局へ学会の抗議決議をさせたいようでした。就職のための学会ナンセンス論、九大のための学会ナンセンス論、こういった内容で、むしろ哲学とは何かを皆で議論し、大学自治とは何かを考えて、今回の事件を哲学者としてどう把握するかを、この大会で考えようというものでした。どれもこれも建前は文句のつけようのないものですが、哲学とは何かを皆で議論する、そしてそこで解答を出して決議するということは不可能に近いし、たしかエイアーだったと思いますが、そういうのは知的怠慢だと言っていたのではないのでしょうか。結局、任意加入は承認されましたが、後の方は何の衷のりも生みませんでした。私たちは就職のためのペーパー・アルバイト用に学会をつくったわけではありません。けれども卒業生と院生たちのある絆がミット・デンケンを中心につくられ、それが院生たちにも、我々OBにも大きなプラスになるのはよいことだと思います。私は「そんなに九大哲学会が問題ならば、学会を廃止しよう。つぶした方がましだ」とひそかに思ったり、席上で口に出したりしたものです。その折に、「ある人々」が「清水さん

によれば」と前置きして話を始めることを経験しました。私の初心がこういう形で理解されていたのかと驚きもしましたが、就職のための学会に盡きると誤解を与えていたことは反省しました。けれども、「哲学論文集」にいい論文を書いて欲しい、この論文集がともかく大きな絆となつて、九哲会の歴史の歩みの証人となつてほしいという私の最初からの願いは一貫して居ります。私たちOBが病いで九哲会に事実上出席不可能となり、寄る年波に勝てなくなつてもこの思いは変らないと考えています。時々、若い方からみて頑迷と思われることがあつても、それは余りにもこの願いが強過ぎるのだと許して頂きたいと思いません。

昭和三十四年本学大学院
博士課程修了・九州芸術
工科大学教授